

# 彫刻の複製モデルによる美術鑑賞教育

—ブランクーシの彫刻を題材に—

土井敬真<sup>1)</sup> 小林俊介<sup>2)</sup>

【要約】図画工作科、美術科の学習指導要領で鑑賞教育の充実がいわれて久しいが、印刷資料による鑑賞には限界があり、実物が持つ魅力を味わうのは難しい。とくに彫刻などの立体作品の持つ量や面、動きなどの造形要素を平面的な映像資料から理解するのは困難が伴う。また、対話型鑑賞など鑑賞の方法論も研究が進んでいるが、言語活動中心になりがちで、体験的・感覚的に作品を理解するための方法論は確立されていない。そこで本研究では印刷資料や映像に加え、彫刻の複製モデルを鑑賞し、さらにそれを生徒自ら模刻する実践を行い、より造形的な理解を深める実践を行った。ブランクーシの彫刻作品《空間の鳥》や《レダ》の縮小・実物大の複製モデルを制作し、鑑賞教材として使用したところ、印刷・映像資料のみの鑑賞より生徒の意欲が高まり、また立体モデルを見ながら粘土による模刻を行うことで抽象彫刻の造形要素をふまえた作品の本質に迫る発言や記述が多くみられた。これらの実践から、実物モデルによる鑑賞と模刻による教材の有効性が示された。

キーワード：彫刻、複製、鑑賞、模刻、体験、造形要素

## 1. はじめに — 本研究の目的と方法 —

学習指導要領において鑑賞教育の充実が強調され、近年、学校教育においても対話型鑑賞教育の方法論が盛んに研究されるようになった。対話型鑑賞教育はもともニューヨーク近代美術館学芸員の鑑賞教育プログラムとして開発されたもので、知識の注入より作品を介してのコミュニケーションを重視するものであり、学校教育においても学習者中心の教育方法として有効性が高いことが了解されている。

しかしながら、「対話型」を採用しても、学校現場においては実物教育が難しいという、鑑賞教育における基本的な問題がまだまだ残されている。美術科や図画工作科の授業において鑑賞教育に割くことのできる時間数は限られており、また実物を有する美術館などへ赴くことや、実物資料を学校現場に借り受けるなどの連携も現実的には難しいことが指摘されてきている。そこで地域の教育現場では実物に代わって画集や教科書など印刷による画像や映像資料が用いられていることが多い。対話型鑑賞の開発者であるアレナス自身、対話型に用いるための簡便なCD-ROM画集を監修しており、その活用法も研究されているが<sup>1)</sup>、工夫された画像・映像資料も実物資料の魅力には及ばないことは当然である。また、特に立体的な作品の場合、平面的な画像・

映像資料で鑑賞することには限界がある。絵画にせよ彫刻にせよ、画像・映像資料から素材感や質感などを含めた実物の持つ造形性を理解することには困難が伴う。

第二に、鑑賞教育が一般に言語活動中心となり、体験的・感覚的に作品を理解するための方法論が十分に構築されていない状況がある。鑑賞教育が表現活動に傾斜してきた当該教科の反省から出てきた経緯からこれは当然ともいえるが、造形的な要素は感覚的に理解されるものであり、感覚の言語化が適切になされず、鑑賞が抽象的な言葉の羅列に終わっては本末転倒である。

この問題を改善するため、鑑賞に身体的な活動(ワーク)を導入することが提案されている。例えば絵画作品における筆触を矢印→などで確認し追体験する活動などである<sup>2)</sup>。簡便に造形要素を理解するには有効な方法といえるが、やはり印刷資料から油彩という物理的な抵抗感を伴う媒体における筆触の存在感を理解するには限界があり、鑑賞活動におけるワークには、いまだ多くの改善の余地があるといえる。

以上の背景を基に、印刷資料や映像に代わって、実物の複製・復元品の鑑賞、さらには複製自体の制作、すなわち模写・模刻を通じた鑑賞教育に想到した。目的に応じた複製を制作して教材とし、さらにそれをもとに実際に複製を生徒・児童自らが制作することで、造形的な理解をより深めることができると考えたのである。そもそも美術の専門

1) 山形大学地域教育文化学部

2) 山形大学地域教育文化学部



図1 実習生による研究授業での実践風景

教育では古典的な絵画、彫刻の模写・模刻等が基礎的な修練となってきたが、これは単に技術的な訓練のみならず、古典的な作品の美的規範を模写・模刻を通じて学習し得るからである。技法や大きさなど複製制作の方法を工夫すれば、作品の造形性の理解という点では学校教育においても応用し得る方法であり、鑑賞教育の「ワーク」としても有効と考えた。

具体的には、第1段階として映像資料と併せて、複製した彫刻や絵画などを鑑賞する。ここでは対話型鑑賞の手法を取り入れながら、作品の造形要素を自らの言葉で表し確認する鑑賞活動を促していく。第2段階は、模写・模刻、すなわち実際に複製を制作することで、自ら手を動かしながら身体的に作者の意図や作品の造形的な成り立ちを追体験する。これによって鑑賞と表現が一体化した授業の構築が可能となると考える。

本研究の着想は、本年、2015年9月14日に教育実習生が山形市の中学校1年生を対象にブランクーシ

(Constantin Brâncuși, 1876 - 1957) の彫刻作品《空間の鳥》の鑑賞を研究授業で行った際、2分の1に縮小制作した複製を制作準備し、鑑賞教材として使用したことによる。学生から授業の構想を聞いた際、画像資料だけでは作品の理解が困難であろうから、複製モデルの提示を提案・助言した。《空間の鳥》は鳥の飛翔から着想されたとはいいながら、かなり抽象化された彫刻であり、その造形性の理解そのものが鑑賞のポイントとなると考えたからである。複製モデルは原寸の2分の1(本体90.9cm)としたが、制作は実際にはかなり大がかりなものになり、彫刻担当の教員(筆者・土井)が担当することになった。オリジナルは白大理石であるが、大理石で制作する事は作品の形態的に高度な技術を必要とされること、また持ち運びが容易な重さではないことから、石膏を用いて複製モデルを制作する

表1:《生徒の作品に対するコメント(抜粋)》

- ・ 折れたり、飛んでいったりしそうな感じ
- ・ 生きてます!
- ・ ひんやり・クールな感じ
- ・ ツーン、みたいな
- ・ 伸びろ!
- ・ われこそ頂点
- ・ 上にのびていく感じ
- ・ 自信家、そりかえっていぼっている感じ

ことにした。最初木で芯材を作り石膏直づけの方法で制作したところ、細い部分から折れてしまうという事故に遭遇した。そこで木彫の方法でほとんど全体を模刻し、白色顔料によって塗装、ワックスを塗布して質感を出すことにした。完成した作品は縮小モデルとはいえ、かなりの存在感がある。

研究授業では複製モデルが生徒にかなりのインパクトを与えたようで、この授業では、印刷・映像資料のみの授業より鑑賞の意欲が高まり、作品の本質に迫る発言が多くみられた。授業では作品の題名=「正解」という認識を避け、生徒自信の言葉による主体的かつ感覚的な鑑賞を促すため、まず作品の題名を伏せたまま、作品の印象を「〇〇みたいな感じ」という形容で表すよう求めたところ、「上にのびていく感じ」や「折れたり、飛んでいったりしそうな感じ」といったコメントが寄せられた(図1,表1)。ブランクーシは本作を鳥の飛翔から発想を得ながらも、それを造形的に単純化、純粋化し、上昇感のある垂直な流線型の形態に表現しているが、上記の生徒の発言はブランクーシの造形的な意図を感覚的に表現し得ているといえよう。生徒に自由にコメントを求めた後、作品の題名を発表したが、印象的だったのはある生徒が「空間の支配者!」と叫んだことであった。この言葉自体はアニメやロールプレイングゲームなど生徒がふだん接しているサブカルチャーの表現に由来するものであろうが、「そりかえっていぼっている」などのコメントと同様、本作が空間に屹立し、その上昇感を持つ単純かつ有機的な形態が周囲の空間に与える影響を的確に表しているものと思われた。作品を中心に生徒を車座に座らせ、作品を取り囲む形態で鑑賞を行ったことも、この彫刻のもつ空間に対する作用を鑑賞するうえで有効な環境設定であったといえよう。

以上のように、この実践は複製モデルによる鑑賞という

方法の有効性を示唆するものであったが、教育実習生の指導のなかで半ば偶然に成立したものであり、この単一事例のみでなく、当該方法の有効性をより客観的に検証し得る実践が必要であると考えられた。具体的には、〈i〉画像、映像資料のみの鑑賞より、実物資料の提示による鑑賞でより生徒の鑑賞意欲が高まり、作品の本質の理解が促進されることがより客観的に検証されなければならない。したがって、まずはこの問題を検証し得る実践が必要であると考えられた。

加えて、複製モデルの作成を通じて筆者が得た経験の有効性を生徒にも体験させたいという欲求が生じた。複製モデルの作成は作品の量や動き、面の構成やつながりといった作品の造形性、およびそこから生まれる印象について筆者により深い理解を促したが、このような体験自体を生徒が味わうことができないかという意識が生まれたのである。研究としては、〈ii〉作品の模刻が作品の造形性のより深い

理解につながるかどうか検証される必要があろう。またその場合、生徒の能力や発達段階に応じて、模刻の方法が吟味されなければならないであろう。

## 2. 授業構想と実践

### (1) 授業構想

以上の問題意識から、上記の〈i〉および〈ii〉を検証し得る教材開発およびその実践を構想した。画像資料のみによる鑑賞と実物複製による鑑賞体験の差異をみる第一段階（1時間目）の授業と、生徒自ら複製を制作する活動（模刻）の教育的効果をみる第二段階（2時間目）の授業である。生徒の主体的な鑑賞を促すために対話型鑑賞の方法を基本とし、知識の提供や指示的な発言は最小限にとどめ、生徒が作品から受けた印象や感受を大切にしながら授業を進める。以下に指導案を示す。

### 美術科学習指導案

#### 1. 題材：この物体は何？—抽象彫刻を味わおう—

#### 2. 目標

- ①自分の感覚をもとに、また対話を通して他者の視点を取り入れながら、積極的に作品の良さを味わおうとする。（関心・意欲・態度）
- ②形や量、動き、空間への作用など、彫刻の造形要素を感覚的に理解し、またそれを言葉によって伝えることができる。（鑑賞の能力）
- ③模刻を通じて、彫刻の基本的な造形要素をふまえた彫刻を作ることができる。（創造的な技能）

#### 3. 指導にあたって

##### ①教材観

本題材はコンスタンティン・ブランクーシの《レダ》（1920年）を対象に、映像およびその複製を通じて鑑賞を行い、さらに粘土で生徒自ら模刻を行う。作者が「単純さの底にある複雑さ」と述べているように、白鳥のイメージから発想されたこの作品には、卵型の胴体部分と三角すいの頭部からなる簡潔な形象のなかに面や量の変化や動きが凝縮され、さまざまなイメージを広げながら彫刻の基本的な造形要素を理解するのに適した題材である。

##### ②指導観

対象から受ける感覚を言葉に置き換えたり、実際に模刻する活動を通して、造形的な感覚を錬磨させたい。鑑賞対象は抽象的な作品なので、生徒は既知のイメージから「〇〇に見える」「〇〇みたい」と反応すると予想される。そこで対話型鑑賞の方法論を活用しながら、「なぜそう思ったの」という問いかけを通じて作品の本質的な要素に接近させたい。また模刻を通じて対象をよりよく観察させ、彫刻が持つ造形要素やその魅力を理解させたい。

##### ③生徒観（略）

4. 指導計画

時間	学習活動
1 時間目	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 映像資料をもとに作品の鑑賞を行う。</li> <li>○ 複製をもとに作品の鑑賞を行う。</li> <li>1) 自由な見方で話し合う。</li> <li>2) 「タイトルをつけるとしたら」？</li> <li>3) 作品の実際の題名を聞いて感じたことを話し合い，発表する。</li> </ul>
2 時間目	<ul style="list-style-type: none"> <li>○複製をもとに模刻を行う。</li> <li>○複製を作ってみて感じたことを話し合い，発表する。</li> </ul>

5. 本時の指導

① 目標

- ・対話を通して作品のよさを積極的に味わう。
- ・作品から受けた感覚を言葉で表す。
- ・模刻を通じて自立する彫刻を制作する。

② 指導過程

【1 時間目（本時1）】

時間	学習活動	教師の発話（○）生徒の反応（△）	指導上の留意点
導入 5分	活動内容について知る	○ひとつの作品をじっくりとみて味わってもらいます。	
展開① 10分	映像資料による鑑賞	<ul style="list-style-type: none"> <li>・5人以下のグループにし，学習プリントを配る</li> <li>○ グループごとに話し合い，出た意見を発表してください。プリントには気づいたことを各自記入しましょう。</li> <li>△わからない，卵みたい？</li> <li>・班で出た意見を適宜発表させる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教室中央を空け，グループで座る</li> <li>・プリントの使い方を板書等で示す</li> </ul>
展開② 25分	複製による鑑賞	<ul style="list-style-type: none"> <li>・複製を中央に提示し，グループごとに周囲から鑑賞させる。</li> <li>○ 立体をみて印象が変わりましたか？</li> <li>○ タイトルをつけるとしたら？</li> <li>・次に作品の実際のタイトルを発表し，感じたこととの異動について話し合う。</li> <li>○作者の考えと，皆さんとの共通点は？</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・360度周囲から鑑賞するよう指導</li> </ul>
まとめ 10分		<ul style="list-style-type: none"> <li>・作者の思いと生徒の考えの共通点をまとめ，学びや感想を記入させる</li> </ul>	

【2 時間目（本時 2）】

時間	学習活動	教師の発話（○）生徒の反応（△）	指導上の留意点
導入 5分	活動内容について知る	○複製を見ながら同じものを作ってみましょう。	
展開 35分	模刻を行う	・芯材に少しずつ肉付けを行う ○ 色々な角度から観察してみましょう。 ○ 時々遠くからみて全体の塊やバランスをみましょう。	・紙粘土の場合、乾燥など扱いに留意させる
まとめ 10分		○ 模刻によって印象が変わりましたか。 ・プリントに学びや感想を記入させる	・1時間目との違いを記入させる

6. 評価

- ①自分の感覚をもとに、また対話を通して他者の視点を取り入れながら、積極的に作品の良さを味わおうとする。（関心・意欲・態度）
- ②形や量、動き、空間への作用など、彫刻の造形要素を感覚的に理解し、またそれを言葉によって伝えることができる。（鑑賞の能力）
- ③模刻を通じて、彫刻の基本的な造形要素をふまえた彫刻を作ることができる。（創造的な技能）

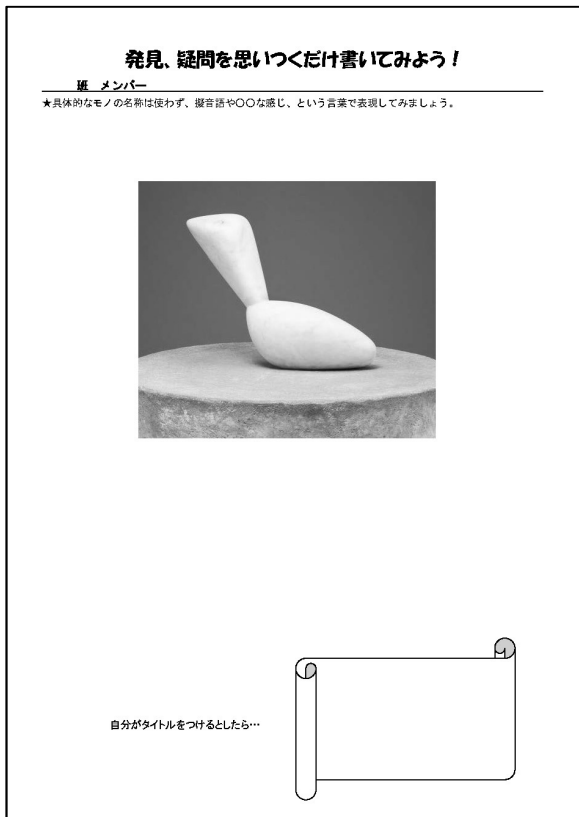


図2 学習プリントその1

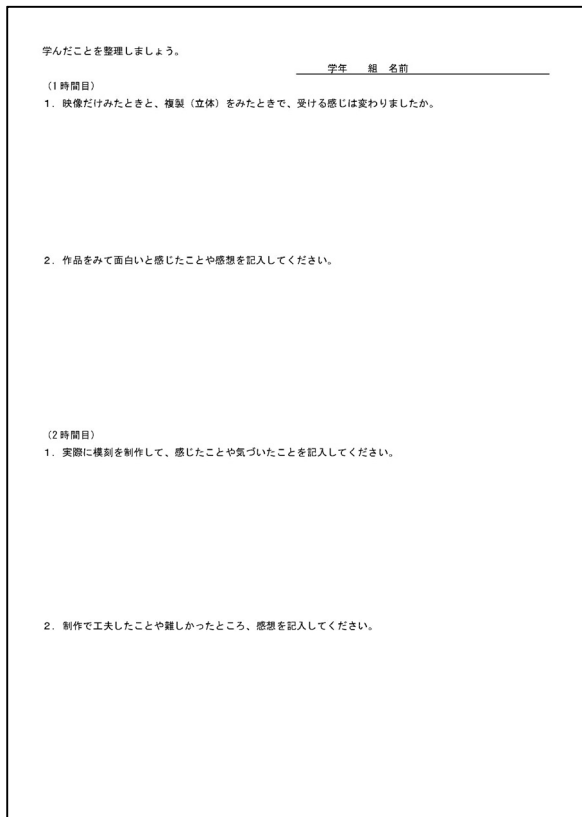


図3 学習プリントその2

授業では学習プリントを使用した。プリントは2枚とし、1枚目は作品に即して印象や思いを自由に書き込めるよう、作品写真を示し、また授業展開に即して生徒の考えるタイトルを書き込む欄を設けた(図2)。2枚目には上記〈i〉および〈ii〉の観点を検証しようよう、以下の質問欄を設けた(図3)。

- ・映像だけみたときと、複製(立体)をみたときで、受ける感じは変わりましたか。
- ・作品をみて面白いと感じたことや感想を記入してください。
- ・実際に模刻を制作して、感じたことや気づいたことを記入してください。
- ・制作で工夫したことや難しかったところ、感想を記入してください。

(2) 授業実践

上述の構想をもとに、平成27年10月29日(木)、山形県のT中学校の協力を得て同校1年4組(男子15名、女子16名の計31名)で授業を実施した。同校は比較的都市部の中規模校で、クラスの生徒は比較的発言も活発で、担任の教諭が美術科であることもあいまって、美術科学習への意欲も高いクラスである。入学後、飲料缶をモチーフとした絵画やデザインの学習はあったが、鑑賞の授業は行っていないとのことであった。

まず1時間目の授業では彫刻作品の鑑賞を行うことを予告した後、作品名・作者名を伏せた状態で《レダ》の画像を実物投影機でモニターに映し出した。教室の机は後方に寄せて8グループごとに車座に座らせ、学習プリントをグループに1枚ずつ配り、作品から受ける印象を記入させたところ、画像のみによる鑑賞では「亀みたい」「滝が流れているみたい」「鳥が川を泳いでいるよう」といったコメントが寄せられた(図4、表2)。続いて石膏による実物大の複製モデルを教室の中央に配置し、2グループごとに複製モデルを360度からじっくりと鑑賞させた。生徒は作品に触れたり、上から下からとさまざまな角度から作品を眺めるなど活発な活動が見られた(図5)。複製モデルを見て受けた印象を学習プリントに記入させると同時に作品の題名をグループごとに考案させ発表を行った。発表では「白滝」や「夜空を見上げる白鳥」といったものから、何にでも見えることから「想像」といった題名を考案したグループもあった(表3)。グループごとに考案した題名を出し合った後に作者名と作品名を発表し、1926年に作成されたブロンズによる《レダ》と合わせて作品の解説を行った。

引き続き2時間目には映像および複製モデルを基に



図4 画像による作品鑑賞の様子

表2：《画像のみによる鑑賞の際の生徒の作品に対するコメント(抜粋)》

- ・ 亀みたい
- ・ 滝が流れているみたい
- ・ 鳥が川を泳いでいるよう
- ・ てかてか
- ・ 音符のような感じ
- ・ 卵から出てきたへび
- ・ つるつるな感じ
- ・ 鳥な感じ



図5 複製モデルを囲んでの作品鑑賞の様子

表3：《生徒の考案した作品のタイトル(抜粋)》

- ・ 白滝
- ・ 夜空を見上げる白鳥
- ・ 想像
- ・ 手
- ・ ふねずみおでん

石塑粘土を用いてグループごとに模刻制作を行なった(図6, 7)。《レダ》の頭部が大きく前方に張り出しているために、2センチ角のスタイロフォームの棒を頭部の芯材とし、そこに石塑粘土で肉付けを行うように指導した。最初のうちは机上の学習プリントの画像を基に制作を行っていたが、次第に教室中央に置かれた複製モデルを観察しながら形態と格闘している姿が印象的であった。粘土による模刻制作の後、2枚目の学習プリントを配布し、1時間目と2時間目でそれぞれ学んだことを記入させ、模刻制作の感想を発表して授業を終了した。



図6 石塑粘土による模刻制作の様子

### 3. 考察

まず今回検証すべき〈i〉の観点であるが、学習プリントに画像・映像資料のみと複製をみたときでどのように受ける感じが変わったかについて書かれた生徒の回答・感想(表4)を基に考察してみる(当日欠席者が1名いたので授業に参加した生徒数は総計30名)。「映像だけみたときと、複製(立体)をみたときで、受ける感じは変わりましたか。」という問いに対して変わったと回答した生徒は29名、あまり変わらなかったと回答した生徒は1名だけであった。変わったと回答した生徒のうち17名が映像資料と複製モデルとで受ける大きさの印象が全く違ったことを挙げている。「写真で見た時は、小さいんだなあと思いましたが、近くで見た時にでかいんだなあと感じました」という意見からは画像・映像では作品の大きさが体感できず、複製モデルによって実際の作品の大きさを感じ取れていることが伺える。このことは「映像ではブーメランにもみえたけど、立体はブーメランには、全然にいていなかった」という感想と合わせて彫刻という立体作品がもつ大きさ、厚み・奥行きといったものが画像・映像資料だけでは理解されにくいと

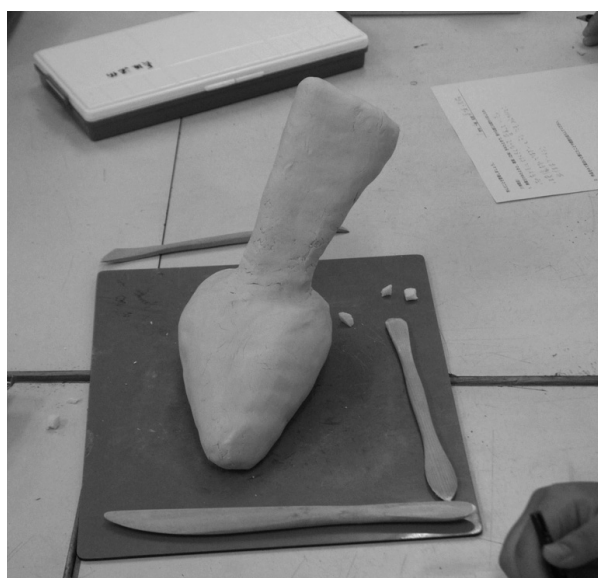


図7 生徒による模刻作品

表4：《複製モデルを見た後の生徒の作品に対するコメント(抜粋)》

- ・ 写真で見た時は、小さいんだなあと思いましたが、近くで見た時にでかいんだなあと感じました
- ・ 映像ではブーメランにもみえたけど、立体はブーメランには、全然にいていなかった
- ・ 頭の形が三角形であることに気づいた
- ・ 映像だけで見たときは首が直線だったけど立体で見た時は、首が少し曲がっていた
- ・ 白鳥の頭のところが、三角形ではなく角が丸みをおびたりしていて、不思議な形でした
- ・ 左右の大きさにびみよーな違いがあることや、いろいろなものに見える所が面白かったです
- ・ 感じたことは頭を白鳥の形にするのではなく、三角形の頭に行っているところが工夫しているなと思いました
- ・ 白鳥の形を、丸と三角だけの単純な形で表しているところがおもしろいと思いました
- ・ 進んでいる、歩いている感じ
- ・ ルンルーン♪楽しそう
- ・ つるつるしている
- ・ てかてかしている

いうことを示している。また「頭の形が三角形であることに気づいた」や「映像だけで見たときは首が直線だったけど立体で見た時は、首が少し曲がっていた」という感想からは画像・映像資料のみでは実際の作品の形態を把握することの困難さと、作品の形態についての理解に複製モデルが非常に有効に作用していることが伺えた。さらには「白鳥の頭のところが、三角形ではなく角が丸みをおびたりしていて、不思議な形でした」や「左右の大きさにびみょーな違いがあることや、いろいろなものに見える所が面白かったです」と、こちらの予想以上に作品の細部にまで観察が行われている他、「感じたことは頭を白鳥の形にするのではなく、三角形の頭にしていることが工夫しているなど思いました」「白鳥の形を、丸と三角だけの単純な形で表しているところがおもしろいと思いました」と作者の造形活動にまで踏み込んだ鑑賞が行われていた。

生徒の活動においても複製モデルを前にすると上から下からといった角度から観察するだけでなく、実際に手で触れてみるなど活発な様子が伺えた。さまざまな角度から作品を見ることでいろいろなものに見える、想像できるのが面白いという意見も全体の半数に近い14名と多く出され、このことから彫刻の造形的特質である立体として空間の中に存在する実在性を強く感じ取ることができたと思われる。また複製モデルを見ることで「進んでいる、歩いている感じ」や「ルンルーン♪楽しそう」と感じた感想からは、彫刻作品に込められた造形要素である動勢・リズムを感じ取っている様子も伺うことができた。一方「つるつるしている」「てかてかしている」といった作品の質感を感じ取ることができたのも複製モデルによる効果といえる。ただし今回の複製モデルが大理石であるオリジナルとは異なり、石膏によるものであることから、可能ならばオリジナルと同じ

素材で複製モデルを制作するか、大理石の欠片などオリジナルと同じ素材の見本を提示することの必要性も今後検討する必要があるだろう。

続いて〈ii〉の検証に関しても同じように学習プリントに書かれた感想(表5)を基に考察を行うことにする。まず「上の首みたいな部分が思っていたよりも複雑で写真とかで見たときは、少しなめていたけど実際つくると、とても難しかった」「単純そうに見えていた形でも、作ってみると意外と難しいことがわかりました」というように27名の生徒が作るのが難しいと回答している。画像や複製モデルを鑑賞した際にはその単純な形態から摸刻作業も簡単だと思っていた生徒が多かったようであるが、実際に摸刻をすることによってその単純な形態を作り出すことの困難さを実感できたようである。特に頭部を立たせることが難しかったようで、観察はしながらも実際よりも頭部の比率が胴体よりもかなり大きく制作していたためにその重さで自立させることが困難になっていたようだ。このことは作品の頭部に込められた動勢を感じ取っていることによることと思われる。実際に頭部は右斜め前方に張り出しているが、オリジナルの大理石の《レダ》が自立できていることから、動勢によりその動きを感じ取らせているだけで、形態的にはそれほど大きく張り出しているわけではない。このことを摸刻することによって生徒も感じ取っていたようで、「見た目はそんなにまがっていないが、実際に作ってみるとまがっているように作ってしまった」や「見た目よりも首のところが曲がったけれど、意外にそこを強調しているところが見えた」という感想の記述がみられた。そこからさらに「作者はよくあのように作れたなあと思いました」や「あんなにきれいにどうやって作ったのかが知りたい」「これを石で作るとなるとかなりの時間があるなと思っ

表5：《摸刻を制作した後の生徒のコメント（抜粋）》

- ・ 上の首みたいな部分が思っていたよりも複雑で写真とかで見たときは、少しなめていたけど実際つくると、とても難しかった
- ・ 単純そうに見えていた形でも、作ってみると意外と難しいことがわかりました
- ・ 見た目はそんなにまがっていないが、実際に作ってみるとまがっているように作ってしまった
- ・ 見た目よりも首のところが曲がったけれど、意外にそこを強調しているところが見えた
- ・ 作者はよくあのように作れたなあと思いました
- ・ あんなにきれいにどうやって作ったのかが知りたい
- ・ これを石で作るとなるとかなりの時間があるなと思って作っていました
- ・ 作品の首の部分、同じ太さではなく、細くなっているところや、太いところがあったこと
- ・ 頭の先のほうがとががってないことや、どうたいの先のほうが丸くなっていることがわかりました
- ・ 頭の所が、たおれそうでこわかったけど、本物をじっくり見て摸刻が出来たので、よかった
- ・ 実物をこんなによくみて物をつくるということがあまりないので、きちょうな体験だった



て作っていました」と作者の制作活動にまで想像をめぐらしていたようである。また「作品の首の部分、同じ太さではなく、細くなっているところや、太いところがあったこと」を感じ取ったり、「頭の先のほうがとがってないことや、どうたいの先のほうが丸くなっていることがわかりました」と、鑑賞だけではなく実際に制作する摸刻という行為を通してより作品の形態の理解が深められたようである。「頭の所が、たおれそうでこわかったけど、本物をじっくり見て摸刻が出来たので、よかった」「実物をこんなによくみて物をつくるということがあまりないので、きちょうな体験だった」という感想からも、画像・映像資料のみではなく、複製モデルを用いた鑑賞と摸刻制作を行ったことによる効果の大きさを実感させられることになった。

またクラス担任の美術科教諭には今回の実践授業を「摸刻を通して、彫刻の鑑賞をできる貴重な機会であった。実際のスケールの、摸刻による作品を鑑賞することで、図版では分からない、スケール、量感、動勢などを直に感じ取ることができるからである。また、視覚のみならず、触覚でも鑑賞できたことが生徒の感性をより豊かなものにできたと考えられる。さらに、一つの作品を囲んで、生徒が丸くなって鑑賞し合う体験も新鮮で、360度どこから見ても美しさを感じることができる彫刻の鑑賞の楽しさを味わうことができ、学び合う授業になった。」と受け止めていただいた。さらに授業後の生徒たちの変化については「具体的な生徒の変容は、頭ではフォルムを理解したつもりでも、実際、摸刻してみることで、立体として形をとらえることの難しさを実感したようだ。そこから、よく観察することの大事さを少なからず学んでいる。また、平面との表現の違いを頭だけでなく、体験として理解した上で、よく考えながら、現在、彫刻の学習に取り組むことができている。」とのことで、今回の摸刻制作まで含めた鑑賞の効果について現場からの貴重な意見を伺うことができた。

#### 4. まとめ

以上のように本研究では〈i〉画像、映像資料のみの鑑賞より、実物資料の提示による鑑賞でより生徒の鑑賞意欲

が高まり、作品の本質の理解が促進されること、〈ii〉作品の摸刻が作品の造形性のより深い理解につながるかどうかという問題について実際に中学校で授業を実践して検証を行った。その結果は画像・映像資料のみではなく複製モデルを用いた鑑賞と摸刻制作を行うことによって、より作品を深く鑑賞することができることを実証するものであった。何よりも画像や映像資料だけによる鑑賞では、鑑賞者と作品が同一の空間に存在できるという彫刻の造形的特質を体感することは不可能なことである。なぜなら彫刻という立体作品が持つ奥行きは、鑑賞者が実際に作品の周りを移動することにより体感できるものだからである。同じように彫刻のもつ造形要素である量感なども実物を前にし、その作品の表面が鑑賞者に向かって張り出していることを体感することでより強く感じ取れるものである。

このように今回鑑賞の対象に彫刻という立体作品を設定したことも実物資料による鑑賞の効果を一層感じさせられる一因であったと思われる。しかし立体作品でなくともその大きさや質感などを体感することができるという点において、平面作品であっても実物資料の有効性は大きいと考えられる。同時に使用する実物資料がどれほどオリジナル作品に近づけるかということの重要性も考えさせられることとなった。今回の研究ではブランクーシの作品の複製モデルを作成したが、実際のオリジナルの作品を直接見ながら作ることはできなかったために、写真などの資料を基に制作することとなった。複製モデルの精度を上げるためにもオリジナル作品を直接見ることや、より多くの資料を収集して複製モデルを制作することも今後の課題とってくるだろう。また、オリジナルに近い複製モデルを制作するためには専門的な知識・技術が必要となる。前述したように小・中・高等学校などの学校現場において美術教員がそのような完成度の高い複製モデルを制作することには困難が伴う。現場の美術教員と連携した鑑賞プログラムの作成や、複製モデルの制作・貸し出しなど、大学教員に期待される役割は大きい。学校現場での鑑賞教育の実態やニーズの調査を行い、それを踏まえた鑑賞教材の作成も合わせて今後の課題としたい。

<sup>1</sup> 吉田貴富「対話的ギャラリートーク型鑑賞指導の教材に関する考察(3)『MITE! ティーチャーズキット 3』を用いた実践から」『教育実践総合センター研究紀要』31号, 2011年, pp. 107-117。

<sup>2</sup> 金子一夫「5. 美術の形式的側面の方法論を理解する鑑賞授業」『美術科教育の方法論と歴史』2003年, p. 78。